

水たまた

通巻 第20号



おくんち弓道大会

おくんちによせて

宮司 竹間 宗磨

間もなく、当社ではおくんちを
迎えます。

御神恩に感謝申し上げる重儀で
最も大きな祭典です。

今年の今までを顧みますと春の
東日本大震災、先の台風と災害の
多い年でありました。

しかしながら季節は巡り収穫の
季を迎えようとしております。

自然の力の前には、為す術があ
りません。人間は大自然の中でと
ても小さな存在であります。その
人間が自然を壊していることも事
実であります。

「地球にやさしい」という言葉
が流行り、頻繁に耳にすることが
ありました。

大切な大きな地球・大自然に対
して「やさしい」というのは、何
か傲慢ささえ感じます。

今一度、私どもに大いなる恵を
与えてくれる自然、それこそ目
に見えない何かに対して畏敬の念を
持って戴き、今年の実りの秋を迎
えたいと存じます。

先の震災とこの度の台風等で被
災された方々・地域の、一日も早
い復興を日々祈念申し上げてお
ります。

高良山くんち日程



高良山くんち(おくんち)は高良大社の例大祭で、高良山では年中最重要のお祭です。例大祭は初日の十月九日、二日目の翌十日には崇敬会大祭、そして三日目の十一日夜の観月祭まで、例年三日間の日程で行われます。

おくんちの期間中は久留米喜多流の謡曲や高良山十景舞、表千家不白流による献茶式、各種武道の演武、高良山獅子舞、御井町風流や横手神楽、さらに観月祭の催事まで含めると、実に数多くの奉納行事があります。別して行われ

る小笠原流弓馬術同門会による弓道百々手式と弓道大会、嵯峨御流生け花展、剣道大会や盆栽展などもおくんちを奉祝して行われます。

高良山くんちは、古くは旧暦九月九日に行われたお祭で「九日↓くんち」から高良山くんちと呼ばれ、江戸時代には有馬家(久留米藩主)の代参があった由緒ある祭としても知られます。

高良山で秋の大祭といえ、かつては御神輿渡御がある秋(旧暦十月)の御神幸祭を指しましたが、大規模すぎて途絶えがちになり、江戸時代に時期的に近い旧暦九月九日のお祭が例祭となっていたといわれています。九月九日は重陽の節句であり、その御神幸の準備の始まり、また一説に御鎮座を伝える吉日でもあります。このような由緒がやがて、御神幸祭に代わって「高良山くんち」を例祭とする流れになったのでしよう。

古文書によると、その高良山くんちでは農具市も立ち、多くの参詣者で賑わったとも伝えます。後の世の子供たちにもこうした高良山くんちの市の賑わいや、家族の健康を願い参詣を重ねた祖先たちの思いも伝えていきたいものです。

くんち日程

十月九日(日)

神生祭 午前零時
例大祭 午前十時三十分
謡曲奉納 久留米喜多流奉賛会
舞奉納 高良山十景舞保存会



高良山 十景舞

高良山の名所十ヶ所「高良山十景」の詩歌に地元婦人会により編曲、振り付けされた舞です

十月十日(月)

崇敬会大祭 午前十時三十分
献茶式・野点拝服席
表千家不白流九州支部



野点 拝服席

十月十一日(火)

第二十一回観月祭 午後六時



観月祭



百々手式
小笠原流弓馬術同門会
境内特設弓道場

観月祭奉納行事

本殿

午後六時三十分～七時三十分

琵琶 筑前琵琶保存会
仕舞 久留米喜多流奉賛会
吟詠 錦城流 加藤城勲
箏曲 中村雅楽美美

境内特設舞台

午後七時四十分～九時

箏曲 生田流正派
久留米にわか 久留米にわか保
存会日吉ぎんなん社中
雅楽 高良大社雅楽同好会
柳川日吉太鼓 柳川日吉神社
久遠太鼓 立正佼成会久留米教会



久留米にわか

神賑行事

九月二十三日(金)

第十一回高良山剣道大会

境内特設剣道場



多数の少年少女剣士達が熱戦を繰り広げます

九月三十日(金)～十月二日(日)

第十二回さつき盆栽秋季展

さつき盆栽趣味の会
中門内展示場



趣のある盆栽に心は和みます

十月九日(日)

境内特設舞台

古武道棒術演武 神影流心気道



コーラス 北野町有志
和太鼓演奏 南筑高校太鼓部

十月十日(月)

第四十一回奉納弓道大会

久留米弓道連盟
境内特設弓道場



老若男女による熱戦が繰り広げられます

境内特設舞台

御井町風流

御井町風流保存会



明治19年の御神幸の先祓いとして始められ
一時中断しましたが昭和52年に復興しました

舞楽 香椎宮雅楽保存会
空手道演武 新極真会佐賀筑後支部

久留米道場

吹奏楽演奏 南筑高校吹奏楽部
和太鼓演奏 筑水高校太鼓部
横手神楽 佐賀県杵島郡白石町有志

十月十日(火)

御茶席 表千家北村宗孝社中

境内及び斎館拝服席

十月九日(日)～十日(火)

第十二回嵯峨御流生け花展

華道嵯峨御流諸岡社中

中門内展示場

占いコーナー 松野ルミ

祭事のご案内 〔十月下旬～十二月〕

山川招魂社秋季大祭

(兼務神社)

十月二十日

勤王殉国の士、佐賀の乱・西南戦争の戦死者以降の旧久留米領内出身の戦没英霊をお祀りする山川招魂社にて秋季大祭が行われます。

明治祭

十一月三日

我が国を近代国家に導かれた明治天皇の御聖徳を仰ぎ皇室国家の繁栄を祈念いたします

摂末社例祭

十一月十三日

境内に鎮座する高良御子社、真根子社、印鑰神社、高良山内に鎮座する伊勢御祖神社、宮地獄神社、巖島神社、鏡山神社、水分社、山外の味水御井神社の例祭を斎行致します。

七五三祝祭

十一月十五日

月次祭に併せ、今年七五三祝を迎えるお子様の健かな成長をお祈り致します。

新嘗祭

(勤労感謝の日)

十一月二十三日

宮中および全国神社で行われる新穀感謝祭です。高良大社では、献米世話人の協力により近郷各地から新米が奉納され、本年の豊かな稔りへの感謝を申し上げます。

もみじ狩り

十一月二十七日

高良山中腹の紅葉谷で行われる秋の恒例行事です。御井校区まちづくり振興会・高良山の森と環境を守る会が中心となり、催し物や出店もあり、もみじを賞でる多くの人々で賑わいます。



もみじ狩り

鎮火祭

十二月一日

日々の生活に不可欠な火の恵みに感謝し、同時に火による災いがないように祈る神事です。祭典後は、消防署の指導の下、神社職員にて消火訓練、救命訓練が実施されます。



鎮火祭

大学稻荷神社冬籠祭(末社)

十二月八日

高良山中腹、大学稻荷神社にて参拝者が祈願を込めた神木を御焚き上げし、その成就をお祈り致します。

煤払祭

十二月二十二日

社殿にて祭典後、宮司以下神職が笹箒にて社殿の煤を払い、新しい年を迎えるための準備を致します。

天長祭

十二月二十三日

天皇陛下の御誕生日にあたり聖寿の萬歳、皇室の長久と国家の繁栄を祈念致します。



煤払い

古神札焼納祭

十二月三十一日

一年間にわたってご守護いただいた神札(おふだ)お守などに感謝申し上げ焼納する神事です。

年越大祓式・除夜祭

十二月三十一日

大祓式は、日々の生活の中で知らず識らずに犯した罪穢れを、人形に移して心身を祓い清める神事です。また今年最後の祭典である除夜祭では一年間のご守護に感謝し、佳き年を迎えられるように祈念いたします。



第四十回 高良山書道展

恒例の高良山書道展・書道上達祈願祭・表彰式が七月十八日に行われました。
七百九十三点の力作が寄せられ、城崎仁恵委員長以下六名の審査委員により各賞が選考されました。



宮司賞
中学三年生
塩山 沙弥

五文字のバランスのとりにくい字句を余白を上手に生かし行書の柔らかさを表現しています。中学生らしい若さのみなごった作品。



福岡県知事賞
高校三年生
原 祐子

高校一般の作品には隷書、行草書などの条幅ものが多数ありましたが、この作品は全体のまどまりがよく横画の線(波磔)が伸び伸びとして日頃の練習の成果が作品に出ています。今後の研鑽を期待します。



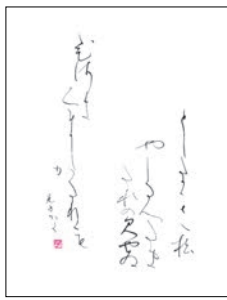
福岡県議会議長賞
小学五年生
安部 桃加

名前まで正確に書かれています。「大」の左払い「造」のしんによつとのゆずり合い、大胆に書き作品を大きく見せています。



久留米市長賞
小学二年生
江上 はるか

丁寧な筆使いであたたかきを感じる作品。名前は子供らしく、「ほ」「る」の結びも力強く上手に書けています。



久留米市長賞
高校一年生
井寺 晃子

墨量の変化が素晴らしい。変体がなす適度に使い、行の流れ、予付のとり方を工夫し、調和のとれた作品です。



久留米市議会議長賞
小学三年生
北原 つみき

ひらがなの曲線をおおらかに書き、「山」の漢字と調和がとれています。終筆まで筆の勢いが続き伸び伸びした作品。



久留米市議会議長賞
小学四年生
江口 拳門

画数の少ない文字をバランス良くしつかりした線質でまとめられています。始筆、終筆がきちんとでき、名前も力強くすばらしい作品。



西日本新聞社賞
中学二年生
佐藤 恵里伽

線がやわらかく筆脈がつづいています。行書の基本ができて、名前も行書体で調和のとれた作品です。



硯山賞
小学六年生
新谷 汐梨

一点一画をしっかりと書き堂々とした線質で伸び伸びしています。すっきりした作品に仕上がりますが名前も余白にきちんとおさめています。



上海堂賞
中学一年生
馬場 礼悟

半紙にまとめにくい課題ですが、バランスよくできています。「社」と「碑」のゆずりあい、すっきりした線質で力強い作品です。



審査委員長賞
小学一年生
小杉 えり

太い線で筆先をていねいに使っています。ひらがなの曲線を太い線、やや細い線と使って表現がかわいらしい作品です。

- | | |
|------------|------------|
| 高良大社賞 | ゆめタウン賞 |
| 小一 まつながことか | 小一 しまぞえみずき |
| 小二 ごとうせい | 小二 大はしてつや |
| 小三 伊藤明子 | 小三 村上彩乃 |
| 小四 古庄恵 | 小四 福山敦士 |
| 小五 緒方梨乃 | 小五 上津原藍 |
| 小六 江口菜央 | 小六 金子実桜 |
| 中一 北島佑夏 | 中一 安部朱音 |
| 中二 福山遥希 | 中二 前原優香 |
| 中三 江崎愛子 | 中三 宗智之 |
| 高三 横山夕姫 | 高三 平田美奈代 |
| 一般 中田めぐみ | 高三 馬場仁望 |

以上三十三名が上位各賞を受賞されました。

兼務社紹介

高良御子神社

(通称 王子宮)



祭神

- 第一王子 斯礼賀志命
- 第二王子 朝日豊盛命
- 第三王子 暮日豊盛命
- 第四王子 淵志命
- 第五王子 緒上命
- 第六王子 那男美命
- 第七王子 坂本命
- 第八王子 安志奇命
- 第九王子 安楽応宝秘命

高良御子神社は古くは「阿志岐王子」「九躰王子」と称し高良大社

の祭神の御子神九柱をお祀りすることから地元では「王子宮」と親しまれ、允恭天皇の御代(四一―四五三)阿志岐山上に鎮座されましたが、神護景雲二年(七六八)に現社地にお遷りになり、以前の鎮座地を古宝殿と言ひ伝えていいます。高良大社所蔵の画縁起には九つの神殿と朱塗りの拜殿や鳥居が描かれており往時を偲ばせます。高良大社の摂社(本社に付属し縁故の深い神社)でしたが後に独立し、地元山川町本村の里の氏神として、又山川町の総氏神となりました。境内には山川町栗林の氏神坂本神社が高良御子神社と相並び鎮座されております。有名な花火動乱蜂は王子宮のお祭と思われがちですが、同じ境内の若宮八幡宮の祭礼の奉納花火であり、残暑が残る山の谷間に大音響を轟かせ、見る者を圧倒感動させずにはおかない地域の貴重な文化遺産であります。時代は変われど、地域の皆様から王子宮と慕われて、神威高き高良御子神社は、高良山上の親神様と共に私たちを見守って下さっています。

高良山の信仰(三)

初寅祭

高良山内で靈験あらたかなお社として、又聖地として信仰を集めているのが奥宮(通称奥の院)です。正式な名称は水分神社と云い、水分神(水神)をお祀りしておりますが、古くから高良の神が靴を残し天に昇ったとも、御廟とも伝えられており、高良大社の数ある末社(本社に付属する社)の中で唯一明治以前の神仏習合が残り、神殿は無く三段に築かれた石段上に石造の宝塔が星霜を経て巖かにあるのです。祝詞を上げ柏手を打ち拝礼する方、線香や花を供して合掌する方等、常にお参りの絶えないお社で境内には清泉が湧き出て、参拝者は勿論の事、登山者の憩いの場となっております。さて「初寅」は元来七福神でお馴染みの毘沙門天王の縁日であります。高良山の初代座主隆慶上人の前に毘沙門天王が出現し、桜の木でその姿を刻み岩窟に安置し、後にこの地に毘沙門堂を建て、更に水に不便なため天竺(インド)の無熱池の水を法力で招き寄せたのが今も湧き出る奥宮の清水と云われます。



(権祢宜 松本 長人)

毘沙門天王と寅の関係ですが、毘沙門信仰で名高い奈良県平群町の信貴山朝護孫子寺の縁起に聖徳太子が寅の年 寅の日 寅の刻に毘沙門天王が出現しお祀りなされたこと等、古くから毘沙門天王と寅とは縁があり、百足(ムカデ)と並んでお使いとも云われます。我が高良山では明治初年の神仏分離で毘沙門堂は清泉の湧き出る神縁を以て水分神社と改められました。毎月初めの寅の日の午前十時より各地より参集戴いた皆様と共に初寅祭をお仕えし、御神恩に感謝申し上げ、心に秘めたる思いや悩み、各人の諸願成就を祈念申し上げております。皆様も一度奥宮さんに足をお運び下さいますよう御案内申し上げます。

高良大社崇敬会だより

「高良大社崇敬会」にあなとも入会しませんか？

活動年度は毎年一月一日から十二月三十一日で、現在久留米市を中心として全国に五百有余名の会員がおります。

主な活動としては

- ①年に一度の総会の開催
- ②十月十日の崇敬会大祭の斎行
- ③伊勢神宮を始めとする全国神社の参拝研修旅行の実施
- ④事業活動を展開し神社の境内整備、神社所有宝物の維持管理などが挙げられます。

役員会を年に数回開催の上、右の①～④を中心とした、総会にて決定された事項を具体化し実施していきます。

本年度は、本坂上石灯笼周辺の修復工事を高良大社と協同で実施しました。

さらに、別記(10ページ)のように高良大社では来年秋に『神幸祭』を斎行する旨決しており、向後斎行される「おみゆき」に協力・奉仕・支援することが、高良大社崇敬会の新たななる活動

内容の一つに加わります。

神社の団体だから…と堅苦しく考えなくて結構です。共に我が国の伝統、高良山の誉れについて熱く語り合いませんか？

崇敬会入会のご案内

年会費

個人会員

正会員 三、〇〇〇円以上

賛助会員 一〇、〇〇〇円以上

法人会員

正会員 一〇、〇〇〇円以上

賛助会員 三〇、〇〇〇円以上

会員接遇

- 毎朝の日供祭にて会員皆様のご安泰ご隆昌を祈願致します
- 高良大社に特別参拝が出来ます
- 崇敬会大祭にご案内致します
- 会主催の行事にご案内致します
- 高良大社宝物館を拝観出来ます

お問い合わせ先

高良大社崇敬会事務局

〇九四二一四三ー四八九三

高良山通信

《境内整備工事》

永年の懸案事項でありました本坂上石灯笼・玉垣・石垣の修復工事がこの程竣工致しました。

本坂は山麓からお見えになるご参拝の皆様にとって、御本殿へ向かう百三十段の石階段のことで、この石段を登りきったところにある左右一対の石灯笼のうちの一基が基礎の石垣から傾き、修復工事を実施したものです。

八月十七日に御本殿において工事安全祈願祭を斎行の後、現場の清祓を行い、工事の無事を大神様に願ひ、着工致しました。

この工事は、高良大社のみならず



修復後の石灯笼・玉垣・石垣

高良大社崇敬会の平成二十三年度の計画事業として取り進められたもので、物心共に御支援を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

また本年六月の大雨で一部崩落した「久留米つつじ原木群」下の石垣復旧工事も同時に行い、境内は益々整備の一途を辿り参詣の皆様を清々しくお迎えする準備が整いつつあります。



久留米つつじ原木群下の石垣の復旧

《職員異動》

〔退職〕

巫女 今村 則子

願ひにより職を免ずる

平成二十三年六月三十日

『筑後国府跡に東北産の土器片』
久留米市文化財専門委員会会長

田中 正日子 先生

(一)

古代における筑前・筑後の両国は、「筑後国風土記」(逸文)によると、もとは大和王権から「つくしミチ(尽道)ノクニ」と呼称された「一つの国」でした。ところが持統天皇の六八九年に新しい教令法規の飛鳥浄御原令を公布したとき、大宰府を置き、あわせて中央派遣の国司の地方支配を強化するため行政単位を小さく分割したものと思われまます。そして地名古称は借字で「筑紫」をあてると、その後、巷では「つくし」を「チクシ」と訓む慣わしも広がったのです。

筑紫からは最も遠い東国地方は、太平洋沖地震の連日の被害情報などで、古代的な地名も耳にするようになりました。『常陸国風土記』は、大化改新後に大和から陸路伝いに一直線に赴ける地域を「ひたちミチ(直通)ノクニ」と呼んで、それが常陸国(茨城県)になったと伝えています。しかし現在の福島・宮城・岩手・青森

の各県と秋田県の一部には、大和政権の支配に抵抗して「蝦夷」と呼称された人びとが各地に盤踞していました。ところが和銅五年(七一三)に出羽国を分置すると、東海・東山両道の奥という意味で「みちのく(道奥)ノクニ」と呼び、これを「陸奥国」と表記したのでです。

陸奥国といえば、九〇一年に菅原道真も加わって完成した『日本三代実録』の貞観十一年(八六九)条に、次のような記述があります。「陸奥国、地大いに震動し、流光晝の如く隠映す。人民叫呼して伏して起つこと能わず。或は屋仆れて圧され死に、或いは地裂けて埋もれ墮る。…城郭倉庫、門樓牆壁の頽落れ顛覆るものはその数を知らず。海口は哮吼えて、声雷霆に似たり。驚濤は涌潮り、沂洄り漲長りて忽ち城下に至る。海を去ること数十百里、浩浩として其の涯淡を辨へず。原野も道路も惣て滄溟となり、船に乗るに違あらず。山に登るも及び難くして、溺れ死ぬる者千許、資産も苗稼も殆ど子無かりき」、というのが主な内容です。

これを貞観地震といっていますが、この時の津波で倒壊した

のが多賀城でした。今年の東日本大津波に襲われた宮城県多賀城市に特別史跡があります。古くは東北の蝦夷対策として、大化改新後に設けた城柵でした。それを奈良時代になると、東北の令制支配の拠点として、陸奥国の政務を執る国府にしたのです。ところが武闘集団として抵抗する蝦夷を鎮圧するため、他国と異なる陸奥国鎮守府や出羽按察使の軍政機関を設けて城柵の形態をもたせていたのです。

奈良・平安時代に律令国家に帰順した蝦夷は、「俘囚」と称しました。ところがなんとその俘囚の一部が、水縄活断層の地震で災害に遭った高良山麓に強制移住させられて、その証拠となる出土遺物が、最近、検出されてから二〇年も経って確認されたのです。

(二)

中央から派遣の筑後国司が初めて赴任した国府跡が、久留米市の発掘調査で、高良山から北西に派生した合川町枝光台でみつかりました。ところがここには、

国府が成立する前の七世紀後半の官衙(役所)遺構もあって、これは「前身官衙」と称しています。そして同じ場所に建設された第

I期の国府遺構は、八世紀中頃まで存続していたことも明らかになってきました。

また平成二年(一九九〇)の東側を限る大溝の調査では、溝の底に積堆した七世紀後半の土器や硯などの官衙遺物の包含層を貫く液状化現象の跡が見つかったのです。市文化財課の松村一良氏の連絡で発掘現場に行つて説明を聞くと、つい「本当ですか」と問い返すほどの驚きを感じました。噴砂跡がなんと『日本書紀』にみえる一三〇〇年以上前の天武朝地震の跡だろうと聞かされたからです。実際に噴砂が貫いた大溝の底部の堆積土は、八世紀前半代の遺物包含層が覆っています。これで大溝を掘った七世紀後半から八世紀前半の間に起きた地震の痕跡とわかれれば、確かに天武七年十二月条が六七九年に起きたとする地震が問題です。「筑紫国、大いに地動く、地裂くること広き二丈(六メートル)、長さ三千余丈(九キロ以上)、百姓の舎屋、村毎に多く倒壊す」とあります。

しかしこの地震は、『豊後国風土記』日田郡条にも、山岡が崩れて「温湯の泉、處々に出ず」とあり、当時の筑紫大宰が管轄

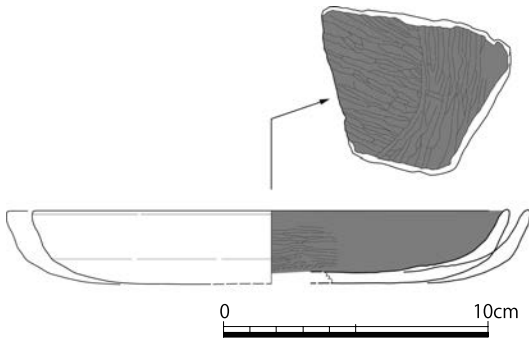


『日本書紀』に見える筑紫の大地震で北側が崩れたとされる高良山神籠石
(写真は鎌倉期に修復された部分と考えられる)

した豊後にも被害をもたらず規模だったのです。
実はこの噴砂跡が発見された前の年に、私は松村氏の求めで「筑後国府・国分寺」(市文化財報告書第59集)に、『日本書紀』は筑前・筑後が分割される前に、筑紫国の一村の出来事を記述した可能性が高いと指摘したばかりでした。そこで噴砂跡の発掘現場から高良社辺りの風景を眺めていると、ふと『日本書紀』が、丘の上にあった百姓の一家が「岡崩れて處遷れり。然れども家既に全くして、破壊されること無し」と書いていた一文を思い出していました。

飛鳥時代の七世紀末から平安末期の十二世紀後半まで、三回も移転した筑後国庁跡の発掘調査に携わった松村氏が、退職を三日前にした最後の仕事場で、また奇跡的な発見をされています。後輩職員でもある小澤太郎氏は、その時のことをパンコンテナー約二〇〇箱におよぶ大量の遺物の中から、在地の土師器と異なる土器の小片を抽出されたと、証言されています。しかもそれは、先の大溝の調査で、天武朝地震後に堆積した八世紀前半の包含層から出土した小片だったというのです。

二〇年前にその小片が出土した時の現場の関心は、同じ包含層から見つかった鍛冶関連の遺物に集中して、土器片などは一括して収蔵庫におさめられていたのです。『久留米市史』(第十二巻資料編考古)によると、大溝の東側では筑後地方の一般的な住居と異なる竪穴住居跡や掘立柱建物跡なども検出され、その関連を古代の文献史料で調べていた松村氏は、確証はないが、国府の周辺の鍛冶工房には東北の俘囚の人たちとの関係があったのではないかと指摘されています。



筑後国府跡出土の陸奥系土器の実測図
(※実測図は口径18.0cm、外側の輪郭口径20.0cmの場合)

写真の土器片を実測し、皿に復元した図
(久留米市埋蔵文化財センター提供)



筑後国庁跡から出土した東北産の土器片
(久留米市埋蔵文化財センター提供)

ます。そして年を経て再び土器片を手にとると、東北の城柵官衙研究会などにも足繁く出掛け蓄積した実力が、今度は俘囚土器と共通する輝きを見抜いたのです。そして職場を去ると、それからは小澤氏との二人三脚による真相究明が始まります。

まず出土資料を東国に持参して研究者たちに意見を求めると、「八世紀初頭の高賀城I期政庁の完成期(七二四年頃)前後」の陸奥北辺の在地土器に酷似して、これが「当地の出土品中に紛れ込んでいたとしたら、全く見分けが付かないだろう」と感嘆する研究者もいたといいます。それを聞いた小澤氏は、多賀城が完成したと考えられる翌神龜二年(七二五)に、陸奥国の俘囚五七八人が筑紫(大宰府)に移配された『続日本紀』の記事に注目したのです。このときの俘囚が筑後にも送り込まれて、国府の周辺に居住させられたのではないかと。しかも「彼らの土器が鍛冶工房関連遺物とともに出土したことだから、そのような作業に従事した」可能性があると、松村氏の見解を補強する文章を今年三月に発表されています。しかしその入稿直後、東北地方を大震災が襲いました。

今回の東北大震災については、責任ある社会的地位にある人たちが「未曾有のことで、想定外の出来事」などと発言していました。史書に貞観地震の惨状を記した天神道真公たちのように、この声はどのように聞こえたでしょうか？。

《神幸祭齋行計画について》

平成四年に五十年に一度の重儀、御神期大祭が齋行されたことは皆様方の記憶に新しいことと存じます。今春には九州新幹線の全線開通、また来春には高良山麓県道東合川・野伏間線の一部開通による九州自動車道久留米インターからのアクセス向上を機として、高良大社においては平成二十四年に神幸祭を齋行する旨、現在計画中であります。この神幸祭(おみゆき)は五十年に一度の御神期大祭での規模を縮小した形式で齋行し、神輿・高良大神には山麓にお出ましを戴き、街並みの様相を御覧戴くことにより、更なる御神威の発揚と氏子崇敬者の弥栄を祈念する祭儀であります。

齋行を一年後に控えた時期ですが、現在高良大社総代を始め、崇敬会、地元の兼務神社宮総代・氏子の皆様などあらゆる方々の御協力を仰ぎながら諸準備を進めている段階であります。

準備の経過につきましては、高良大社公式ホームページ、社報『たまたれ』、回覧状その他により随時御報告申し上げますので、御協力の程よろしくお願い申し上げます。

《富松神社竣工・遷座祭齋行》

高良内校区の兼務神社富松神社は去る平成二十年八月五日午後三時不審火により全焼し、爾来氏子による復興検討委員会の発足、募財活

動の展開によ

り三年越しで

この度竣工し、

遷座祭が齋行

されました。

飯殿であった

高良大社で祝

詞奏上の後、

竣工なった新



しい富松神社へ御遷座、本殿奉告祭を齋行し氏子一同喜びを分かち合いました。また七月二十三日には遷座後、初めて夏祭も齋行され子供みこしの渡御もあり人々の笑顔の絶えることはありませんでした。

《マークエステル氏神話絵画奉納》

フランス人画家マークエステル氏の絵画奉納奉告祭が七月十三日に齋行され、関係者一同思いを新たに致しました。氏は日本全国の神社に日本神話『古事記』を題材にした絵画を御奉納されております。

今回奉納された絵画は六十号で、

当社御祭神である『高良玉垂命・応神天皇・住吉大神』そして『神功皇后』を

描き、壮大な

古代ロマンを

彷彿とさせる

題材となつて

おります。祈

願所控所に常

時展示してお

りますので是非御覧下さい。



鎮守の杜

絆(ともだち)

九州国立博物館で一週間限定神護寺所蔵『源頼朝・平重盛像』の対面公開展示を拝観する機会に恵まれた。歴史的な背景、また保存状態またお顔の凛々しき振りからも平家の末裔の方には申し訳ないが、圧倒的に頼朝像が注目されていた。しかしながらお二人の顔相には各宗家を護持せんが為の覚悟が数百年経った現在でも琴線に訴えるものがあった。一所懸命という本来の言葉通り、先人は命を懸けて事あらば切腹という行為で己の出处進退を決めていた。翻って現在の国難において事が起こると頭を下げるだけの御尊顔を拝するに、そのような気構えは微塵も感じられない。▲かの東日本大震災から半年以上が経過して、我々日本人もそろそろ冷静に考える時期になり、慮るに今回の震災で諸外国から物心ともに有難い支援を戴いた我が国であるが、十年を経たアメリカ同時多発テロ、ハイチやニュージーランドでの

大地震、ノルウェーの銃乱射事件、中国新幹線事故、などの『トモダチ』の困難時に何をしていたのかと考えてみるべきであり、敬神生活の綱領にある『世界の共存共栄とを祈ること』の条文を遵守出来ていないのでは：との反省も当然あるべきだろう。恐らく平成二十三年の漢字大賞になるであろう『絆』という重たい文字に思いを馳せて毎日を過ごすべきではないか。▲来たる平成二十四年は天武天皇の詔により『古事記』が編纂されてより壱千三百年を迎える。編纂当時の国勢として、隣国と対等に向き合う為に日本国の正史を公示する必要があったであろうことは容易に想像できる。▲日本の伝統文化を守る最後の砦といっても過言ではない神社界また神職たちに課せられた宿題は余りにも大きなものになってしまったのではないだろうか。(紀)

「たまたれ」 通巻二十号

平成二十三年十月一日発行

発行者／高良大社社務所

福岡県久留米市御井町一番地

電話〇九四二一四三二四八九三

FAX〇九四二一四三二四九三六